

国
(問題)
語
2013年度

〈2013 H25072024〉

注 意 事 項

- 1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は3～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBの芯を入れたシャープペンシルで記入すること。
- 4 受験番号および氏名は、試験がはじまってから、解答用紙の所定欄に正確に記入すること。記述解答用紙の所定欄（2か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名のみを記入すること。
- 5 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本に従い、正確に正しいに記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
- 6 マーク解答用紙のマーク欄には、はっきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムで正しいに、消し残しがないようによく消すこと。
- 7 マークする時 ● 良い ○ 悪い ○ 悪い
 マークを消す時 ○ 良い ○ 悪い ○ 悪い
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

新石器時代以来の人類史的大変化に曝^{さら}されるに至ったところに今日の根本的な危機性があるという事は、もともと色々な局面について自覚され見詰められ考慮されなければならないであろう、と思ひ続けるようになってからもう十数年もたった。「世界に応答するもの」としての精神は、こうした時代に対してどのように「応答」し、どのように立ち向かうべきなのか。その或る立ち向かい方に基ついて、どのように過去・現在・未来に対すべきであり、どのように個々の認識や一つ一つの芸術や様々な芸能や事物に即した批評や等々を展開し、どのような作品やどのような生活形式を産み出すべきであるのか。此処には、眼の廻るような巨大な歴史の延長と変化が、一つ一つの小さな個別的物事への注視と分かち難く交叉し合っている問題群の世界がある。此の世における極大なるものと極小なるものが各処で交叉し合つて私たちの眼前に在り、同時に私たち自身を組み込み且つ貫き通している。現代の精神世界の根底を形づくっているものはこの問題群なのである。だから、この問題群に忠実に対決することを描いて今日において知的誠実と思考の眞理性を確保する道はない、と言つてよからうかと思う。

現代が含み持つ人類史的問題群を丸きり度外視した別の実用的目的から「論題」を取り出して恰もそれが問題であるかの如く受け取つて、それに対する精密な「解答」を作製しようとする研究上の姿勢がもし在るとすれば、その仕事は作業上の経験とはなりうるかもしれないが精神の経験とは決してなりえないし、その上、学問上も生活形式の上からも決して「真なるもの」とはなりえない。なぜなら、其処で選ばれた「問題」なるものがベルクソンの言う「インチキの問題」だからである。真と偽の質的な違いは、通常の「科学方法論」が考えているようには、「解答」の在り方や「解決」の仕方の中にだけ現れるものではない。「真と偽」の質的差異は「解答」の在り方などよりは「問題」の立て方の中にこそ遙かにメイリヨウに現れる。むしろ其処にこそ真偽の別は典型的な形で現れると言つてよい。「問題」の在り方と較べるならば「解決」や「解答」の分野は、真偽の質的な違いよりも、上手・下手とか器用・不器用とか才・不才とか優雅・無骨とか緻密・粗忽とかという系列の違いをより多く包含している領域なのである。すなわち「解決」や「解答」の中には真偽の別が典型となつて存在しているのではなくて、むしろ美醜の別がともすれば優先的に現れるのである。その場合、悪くすれば外見的美醜が支配的とさえなる。その時、真偽の質的な違いは表面美の前に覆ひ隠されて、虚偽がしばしばまかり通り、真なるものがしばしば地下に葬られて了う。

「問題」の領域にはそのような顛倒^{てんとう}は起こらない。そのことは私たちの使う形容詞の中にも表れている。イ 私たちは「これは重大な問題だ」とか「些細な問題だ」とかと言う。□ それらの形容詞が示しているものはすべて美醜の事ではない。

ハ それらは真偽の質的違いを大小・軽重の記号で象徴的に示しているのである。二 「瑣末な問題」をさも重大問題の如く扱っているとき、それは真ではなくて偽なのであり質的に間違っているのである。ホ それに反して「解答」は、「優雅な答」や「拙い解決」を「正解」「誤解」と共に形容語として持つている。ヘ

こうして私たちは、真なるものと偽りなるものとの質的な違いを発見しようとする限り、「解答」の世界への警戒と「問題」の分野の重視へと導き入れられることとなる。それがどんなに拙い形を採り、どんなに混乱した筋道の中に在り、どんなに醜い外貌を持つて矮小な姿で現れようとも、そのゲテモノの中に、今日の私たちを取り巻き且つ貫いている甲^アが影を落としているならば、その影から発する微かな光を見逃がしてはならないのである。落曉^{らくせう}せるものの中にはしばしば重大な変化の本質的眞実が歪められた形を持つて存在している。そしてその形とその核心との交錯した関係こそが「問題」の中の「問題」なのである。廃たれ行くもの、レイラクシ粉砕されて断片と化したもの、「灰の中に輝きもせず横死せるダイヤモンド」にありつたけの眼光を注ぎ込んで、その質を見極めようとしないうところは、真偽の別は遂に分からず、現代の根本的な危機性もまた見過ごされて了うことであろう。そこには「処方された幸福」を「自ら開発した幸福」と取り違えてペンペンと満足の日を送る1^{イチ}が残らざるをえないであろう。

そうして、生活形式における「処方された幸福」への満足が対応する認識論上の方法が、無警戒な「解答」主義なのである。それは先ず、反省的検討を経ることなき「体系性」の偏重となつて現れる。乙

省な「体系性」の偏重が在る処には虚偽意識の発生がつねに可能となる。其処には「問題」への忠実に代つて「解答」へのトウスイが支配しているからである。真と偽の質的区別はここでは全く忘れ去られて虚偽意識の連絡網の中に満足気に安住する。無反省な「体系性」の偏重が知的生産の現場で最も卑俗な形を採つて現れる時、或る種の論文審査制度の問題が生まれるであろう。その制度が「結論」の綺麗さとそれを導く順序の滑らかさだけを尊重する時、結果は、真なるものの社会的蓄積に寄与する代りに、偽りなるものの蓄積に役立つことになる。かつてのペンヤミンの光榮は、その制度によつて物の見事に排除されることを通して、真なるものの社会的蓄積の営みと偽りの「解答」主義の2^ニ的凝固との対比を身を以て鮮やかに示したところにあつた。今日の世界はペンヤミンの天才を持つことは恐らく出来ないであろうが、——それ程までに精神の危機の進行度は深いと見なければならぬであろうが、それだけに、現代世界の根底に盤踞^{ばんきよく}する問題群に対して一人一人が一つ一つの個性性を通して肉迫していかなければならないであろう。

そして幸いにも私たちの前には、現代世界の問題群が此の世に初めて姿を現した時に、恰も3^{サン}世界の「創造の第一日」に遭遇した者として、その問題群に全知全能を傾けて立ち入つた尊敬すべき先輩の群れがある。シェールレアリストの何人かやフォルマリストの何人かやフランクフルト学派の何人かや、ヴァレリー、ブレヒトその他の知性や、それらの周辺にあつて色々な呼び名を持つて現れた受難経験の探求者たちがそれである。身を以て行い身を以て考察し、悲劇的経験も喜劇的方法も哲学的洞察も社会史的展望も精神史的考察も、それらすべてが精神の存続と救済を賭して行われたのが彼らの仕事と生涯であつた。私たちはそれらを軽薄に受け取つては断じてならない。彼らの仕事の表面を物知り顔になぞらえるのではなく、彼

らの精神と方法の根底にまで達してそこに井戸を掘らねばならぬのが、私たちの僅かに喜ぶべき運命なのだ、と思うのである。
(藤田省三「精神の非常時」による)

注 ベルクソン (1859～1941) …フランスの哲学者。著作に『物質と記憶』など。

ベンヤミン (1892～1940) …ドイツの思想家。著作に『パサージュ論』など。

シュールレアリスト …一九二〇年代以降にフランスで起こった芸術運動(シュールレアリスム)の活動家たちの総称。

フォルマリスト …一九一〇年代のロシアで起こった芸術批評家・理論家たちの総称。

フランクフルト学派 …一九三〇年にドイツで設立された社会思想・哲学の研究者グループの総称。

ヴァレリー (1871～1945) …フランスの文学者、思想家。著作に『ムッシュー・テスト』など。

ブレヒト (1898～1956) …ドイツの劇作家、詩人。著作に『三文オペラ』など。

問一 傍線部A「精神の経験」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 人類史的大変化を今日の危機性として受け止めて立ち向かうこと。
ロ 認識や芸術や芸能や批評を展開し作品や生活形式を産み出すこと。
ハ 美醜の別を付けつつ「論議」から精密な「解答」を作成すること。
ニ「解決」や「解答」の在り方を「問題」の分野と較べてみることに。

問二 次の一文は、本文中に入るべきものである。最も適当な箇所を、本文中の空欄 から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

先に見た「解答」の世界が持ちうる性質はここにも暗示されていると言つてよからう。

問三 空欄 甲 に入る最も適当な語句を、本文中から三字で抜き出して記せ。

問四 傍線部B「その形とその核心との交錯した関係」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 真と偽との質的な違いが、「解決」の中ではなく「問題」の立て方に現れている様子。
ロ 醜い外貌のゲテモノの中に、混乱した形で時代の根本的な問題が存在している様子。
ハ 真と偽との質的な違いが、大小・軽重等の記号によって象徴的に示されている様子。
ニ 醜い外貌のゲテモノの中に、ありつたけの眼光を注ぎ真偽の別を見分けてゆく様子。

問五 空欄 1 3 に入る最も適当な語句を、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- 1 イ 美醜の別 矮小な姿 ハ 危機の世界 ニ 精神の死骸
2 イ 反省 個別 ハ 制度 ニ 典型
3 イ 圧倒的 知性的 ハ 危機的 ニ 悲劇的

問六 次の四つの文を並べ替えて空欄 乙 に入れる場合、四番目に来るものはどれか。最も適当なものを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 一つ一つの事実は確かなものであっても、それらが一つ一つにおいて含み込んでいる問題は押しならされて、快適な「公道」がその国をつなぎ合わせるのである。

ロ その「つなぎ方」の妙を通して、その中央への連絡道路の美しさや高速度と運搬効率とによって、人はいとも簡単に「中央」へと連れ込まれる。

ハ あたかも「帝国」の建設のように。

ニ 真実かどうかは別として、一つ一つの事実を、決められた秩序形式に従って巧みに円環的「体系」へとつなぎ合わせて「閉じられた王国」を完結的に作り上げるテクノロジの世界がそこには在る。

問七 本文の内容に合致しないものを次の中から二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 虚偽意識の連絡網に対抗して現代社会の危機性に向き合うためには、真なるものの社会的蓄積が有用な解決法だ。
ロ 現代世界の危機性をとらえる上で、さまざまな受難経験を被りながら探求を行ってきた人々の仕事は導きとなる。
ハ 真と偽との質の違いを発見する際、落魄せるものが持つ混乱や矮小さにのみ変化の本質的現実の現れが見出せる。
ニ「問題」の領域から見ることで「真と偽」の質的差異を判別する在り方が、現代の危機性を見極める際に必要だ。
ホ 生活形式における「処方された幸福」に満足する日々からは、現代への根本的な「応答」の方法は見出されない。

問八 傍線部1～3の太字のカタカナの部分の漢字に直せ(漢字は楷書ではっきり書くこと)。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

人の身ぶりに社会性があり、そこに一般化できるような法則があることを、学問的に最初に指摘したのは、マルセル・モースというフランスの民族学者である。「ある社会のなかで、伝統的な流儀にしたがった身体の使い方」のことを、モースは「身体技法」と名付けた。

人間が世界に対してはたらかけていく時に、「A」はもともと根源的な道具として一定の「B」を形づくる。その能力をさらに拡大させようとする時に、人間は、行動目的にしたがった「C」を、さまざまな形で生み出してきた。「C」とは元来、身体の延長物としてつくられ、それを扱う「技術」のあり方についても、本来は「A」の延長上にあつたはずのものである。

モースのこうした考え方は、文化人類学やその関連分野で注目され続けてきた一方で、後に続く人々の考察が、「身ぶりによる表現・伝達や、文化の中の身体の象徴性の面に向けられ、身体技法がかかわっている重要な領域である道具、住居をはじめとする物質文化や技術との関連を問題にした研究が、皆無に近いこと」を、文化人類学者の川田順造氏は「いぶかしく思う」と言っている。

身体動きというのは、言葉で書き留めるにも、数値に還元するのにも、画像で写し取るにしても、運動の実質を客観的に示すことが極めてできない性質のものである。複雑な情報をもつ身体技法から、有効な情報を引き出すためには、どのような視点にもとづいて、どのような情報を導き出すのか、という「視点の設定」を明確にしなければならず、その上で対象となる技法内容の理解を掘り下げていかなければならない。「視点の設定」とは決して恣意的なものではなく、運動の本質を導き出すための論理的な視点でなければならず、そこからは、研究者自身にどの程度運動が見えてくるのか、ということがおのずと露呈される。したがって技法の本質へと理解を深めていくためには、対象となる身体に、感覚上の共感を結ぶことのできるような訓練を積まなければ、表層をなぞるだけの解釈に留まらざるを得ないだろう。

1 身体技法の研究は、いまだ活字化されていない生きた現象に踏み込んで、その内奥に潜む運動の構成原理をつかみ取つてこなければならぬ。そのための方法が明確に語られたことがなかったため、活字に対する信頼が強い学者ほど、言語化することが比較的容易な、象徴論やコミュニケーション論などの方向へと、研究の矛先が遷つていってしまうのではないかと想像する。

2 川田氏は、文化の比較を行う際に、「連続」における比較と「断絶」における比較ということを区別していて、前者は「歴史的な相互関係をもつ文化の、影響、伝播、受容、非受容、変容」などが問題となり、後者は直接の交渉がまったくない地域を比較することで、「人にとつての文化の意味を根底において問う」ことを目的としている。その方法としては三つ以上の文化の比較をする「三角測量法」ということを、氏は提唱している。

川田氏が「連続による比較」と「断絶による比較」を区別してとらえようとするのは、おそらく氏が西アフリカ内陸社会という、日本からもヨーロッパからも遠く距離を隔てた社会のなかで、文明社会がとうの昔に忘れ去つてしまった文化の根源的な姿を発見したことにもとづいているからだろうと想像する。しかし研究者が、文化の根源へと理解を深めるのは、比較対象の多さや距離の遠さばかりではなく、選んだ対象が内包する情報を掘り下げていくことのできる研究者自身の資質にかかっているのではないかと私は思う。

3 身体技法は社会的に形成され、それぞれの民族に固有の文化的特徴を示す。しかし日本人に固有の身体技法の特性を知ろうとする場合、異文化との比較というのは、それぞれの文化間の差異や共通点を整理する有益な視点を示してはくれるが、身体運動の合理性を質的に高めることを追求していくと、社会的・文化的な刷り込みの延長下に、身体本来の「自然性」にもとづく一定の構造が現れることもたしかである。その技術の領域では、比較や解釈を拒絶して動じない運動構造上の原理原則が存在するようにも見える。

たとえば日本の茶道における「D」について考えてみると、そこには一定の目的のなかで、高い合理性をもつ「動き」や「構え」が集成されていて、完成度が高くなるほど、一時代的な変化によつては変更の利かない強い普遍性をもつことがある。より具体的に言うならば、「坐の技法」などについては、日本国内でも千年を超えて持続する強い技術があり、それを支える「呼吸」や「内観」といった技法にかなしては、さらに古代中国や古代インドといったアジアの古層につながる、高い普遍性をもつた技法が内包されている。したがって、文化間の比較を入口として、個々の身体技法への探究を深めていく時に、私たちは時代や地域の隔たりを超えて貫く根源的な「自然」という次元に歩を進めていくことができるのではないか、という展望を抱いている。

自分と異なる文化に出会う時、当たり前前になつて自国の習慣がはじめて意識される。その時に「どちらの文化が優れているか？」という優劣の意識が生まれがちである。「二文化間比較」という方法には、どちらか一方の文化に価値判断の基準を置こうとする意識がはたらかややすいのだ。たとえば「洋服の似合う身体」が美の価値基準として刷り込まれていると、「日本人の足は曲がっていきたくない」という価値判断が生まれる。しかしその価値基準はあくまで西洋文化の上に立っているもので、日本人や日本文化を判断する正当な基準にはなり得ない、ということになる。そこで、もう一つの異なる文化を入れて三つ以上の比較を行うと、三者それぞれが相対化されて、「どれも多様な文化の一つである」という風に、それぞれを公平な見方で観察しやすい、という利点がある。

川田氏は日本とフランス、そして西アフリカ内陸社会の民族を対象に、農作業や洗濯、育児、住生活など、生活全般にわたる身体技法の比較を行う。たとえば、「洗濯をする」という単純な作業でも三社会で慣用されている身体技法は相互に大きく

異なり、それは「歩き方」や「育児の仕方」、物の「運搬の仕方」など、他の身体技法についても、それぞれの社会に固有の文化的な特徴が見られることを示している。また日常的に行われるこれらの動作のなかで、洗濯の姿勢と同様の動きが他の作業姿勢にも見られたり、同一社会内における「身体技法の構造的な共通性」があることを、川田氏は指摘している。

無数に展開される生活場面の動作のなかに、「構造的な関連性がある」という川田氏の指摘には、動作の外形からさらに踏み込んで、身体技法の「質的な特徴」への着眼が認められる。つまり「歩く」「坐る」「屈む」という動作はどれも別々の形をしているが、たとえば「腰を入れる」という質的な動きについては、歩行姿勢にも、坐姿勢にも、前屈姿勢にも同様に存在し、それらの動きには、骨盤周りの操作に一定の「構造的な共通性」がある。

「腰を入れる」という技術は日本に古来伝わる独特の表現であり、他の文化圏にも、別の合理性を備えた形で、「身体技法の構造的共通性」が認められるというのである。つまり異なる **E** のなかに、「構造的な共通性」を見出す論理的な視点が設定できるようになると、**F** を支える身体技法の基本構造を理解することについても、大きく可能性が開けてくるように思う。

次に **G** は、「物質文化を含む技術文化、住生活や育児様式、ひいては世界観、人間観などの価値意識と直接間接のかかわりをもっていること」、さらに「身体技法は身体伝承の一種として同一社会内で集合的に反復され、あるいは教育や訓練によって、一種 **H**」とでもいうべき身体が無意識的運動連鎖が形成されていて、世代から世代へ、かなりの持続性をもって継承されるものではあるが、物質文化、生活様式をはじめとする外的条件の大きな変動によって変わりうるものである」と川田氏は指摘している（川田順造「基層文化としての身体技法」『ヨーロッパの基層文化』所収）。

川田氏が一九八八年に発表した「身体技法の技術的側面」という「三角測量法」を基礎にした論文では、西アフリカ内陸社会の、モシ社会の記述が綿密に積み上げられている一方で、フランスや日本にかなする文化の記述は必ずしも体系的に行われていたわけではなく、むしろ西アフリカ内陸社会の文化を明らかにするための比較対象として、断片的に参照されているような印象を受ける。「西アフリカ」という未知の領域への氏の強い関心に対して、すでに多くの文化情報が語り尽くされている日本とフランスへの関心の度合いは、書かれた言葉の分量と密度からも伝わるものがある。もちろんこれは批判で言っているのではなく、「三角測量」という方法を用いたとしても、研究者の関心や情熱が強ければ強いほど、その対象への記述に厚みが増すことはむしろ自然であると考ええる。

その後、一九九五年に刊行された『ヨーロッパの基層文化』という共同研究では、十七世紀のフランスを中心とした身体技法研究が発表され、さらに二〇〇八年には、日本文化を中心とした『もうひとつの日本への旅』という著書が発表されている。異なる三つの文化圏を比較するという壮大な研究が、それぞれの深みを掘り上げるようになるためには、実に四半世紀の歳月がかかっている。こうした息の永い研究によって、川田氏は異文化への偏見を是正し、文化の根源へと歩を進めていくための道筋を示してくれているように思う。

日々くり返される習慣のなかで身につけられた身体技法は、当たり前前のこととして無意識の底に深く沈んでいて、それを行う当事者に自覚されることは稀である。それゆえ、私たちは自覚したことのない自分自身の歩き方を容易には変えることができない。つまり身体技法の未知なる領域は、私たち自身の日常のなかにも無数に存在するのであって、そうした足元の盲点は、ともすると遠く距離を隔てた社会の民族文化よりも、解明することが難しい問題であるのかも知れない。

（矢田部英正『たたずまいの美学——日本人の身体技法』による）

問九 空欄

イ	A	技術	B	身体	C	方法
ロ	A	身体	B	道具	C	技術
ハ	A	能力	B	身体	C	流儀
ニ	A	身体	B	技法	C	道具
ホ	A	法則	B	道具	C	方法

に入る語として最も適当な組み合わせを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

問十 空欄

イ	1	3	に入る語として、最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。
ロ	さ	ら	に
ハ	つ	ま	り
ニ	た	し	か
ホ	す	な	わ

問十一 空欄

に入る漢字一字の語（本文中で他には用いられてはいない）を、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十二 傍線部「根源的な「自然」とはどのような意味か、最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 人類が生きる上で必要な環境
- ロ 生物として共有している本能
- ハ 民族をこえた構造的な共通性
- ニ 文化圏からもたらされる差異
- ホ 身体技法研究のための補助線

問十三 空欄

E

F

G

H

て、最も適当なものを選び、その記号の記入欄にマークせよ。この内、FとHに入る語句とし

イ 身体的記憶

ロ 生活全体

ハ 身体技法

ニ 運動形態

問十四 傍線部2

「対象への記述に厚みが増すこと」とは、具体的にはどのようなことを指すか、最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 西アフリカ文化を明らかにするのに重点を置くこと。

ロ モシ社会についての記述のみを綿密に積み上げること。

ハ 異なる三つの文化圏のそれぞれの深みを掘り上げること。

ニ 日本とフランスと西アフリカについて三角測量を行うこと。

ホ 日本とフランスについて分量と密度のある言葉を費やすこと。

問十五

本文の内容に合致しないものを次の中から二つを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 時代や地域の隔たりを超えて貫く普遍性が存在する。

ロ 習慣的な身体技法を、当事者が意識することは稀である。

ハ 日本人には、他の文化圏とはまったく異質の身体技法がある。

ニ 異文化を比較すると、ともすると優劣の判断に傾きがちになる。

ホ 身体技法の研究方法は、言語化が難しく語られることは少なかった。

(三) 次の文章は後深草院二条の『とはすがたり』の一節である。後深草院二条は危篤の父親の看病をしている。これを読んで、あとの問いに答えよ。

今日などは、心地も少し **A** やうなれば、もしやなど思ひぬたるに、更けぬれば、かたはらにうち休むと思ふほどに、寝入りにけり。 **B** されて起きたるに、「あなはかなや。今日明日とも知らぬ道に出で立つ嘆きをも忘られて、ただ心苦しきことをのみ思ひぬたるに、 **C** 寝たるを見るさへ、悲しうおほゆる。さても、二つにて母に別れしより、我のみ心苦しく、あまた子どもありといへども、をのれ一人に三千の寵愛も、みな尽くしたる心地を思ふ。笑めるを見ては、百の媚ありと思ふ。 **D** たる気色を見ては、ともに嘆く心ありて十五年の春秋を送り迎へて、今すでに **E** なむとす。君に仕へ、世に恨みなくは、つつしみておこたることなかるべし。思ふによらぬ世の習ひ、もし君にも世にも恨みもあり、世に住む力なくは、急ぎてまことの道に入りて、我が後生をも助かり、二つの親の恩をも送り、一つ蓮の縁と折るべし。世に捨てられ、頼りなしとて、また異君にも仕へ、もしはいかなる人の家にも立ち寄りて、世に住むわざをせば、亡き後なりとも、不孝の身と思ふべし。夫妻の事におきては、この世のみならぬことなれば、力なし。それも、髪をつけて好色の家に名を残しなどせむことは、かへすがへす憂かるべし。ただ世を捨てて後は、いかなるわざも苦しからぬことなり」など、いつよりもこまやかに言はるるも、これや教への限りならむと悲しきに、明け行く鐘の声聞こゆるに、例の下に敷く車前草の蒸したるを、仲光持ちて参りて、「敷き替へん」と言ふに、「今は近づきておほゆれば、何もよしなし。何まれ、まづこれに食はせよ」と言はる。ただ今は何をかと思へども、しきりに、「我が見るおり、疾く疾く」と言はるるより、今ばかりこそ見られたりとも、後はいかにと、あはれにおほえしか。

注 車前草…多年草の一つ。おおばこ。薬草として用いられた。

問十六 文中の空欄 **A** **E** に入る最も適当な語を、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。
ただし、いずれについても、空欄の箇所にあさわしく活用させた語形が入るものとする。また、同じ記号を二度以上用いてはならない。

イ うれふ □ おこたる ハ おどろく ニ はかなし ホ わかる

問十七 傍線部1「心苦しきこと」の内容として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 我が娘の行く末が心配であること。
□ 人の命とははかないものであること。
ハ 生き別れになった母親が気になること。
ニ 最愛の妻を残して旅立つことへの心残り。
ホ いつになったら休息できるか気がかりなこと。

問十八 傍線部2、5の主語をイ「後深草院二条」、ロ「後深草院二条の父親」、ハ「イ・ロ以外の人物」に分類するとき、それぞれに該当するかを右のイ・ハの中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

問十九 傍線部6「今は近づきておほゆれば、何もよしなし。」の意味として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 今となつては親しいもの感じられるようになったので、どんなことを言ってもかまわない。
□ もはや似た者同士のように思われるので、なにをとりあげても違ふと感ぜなくなつてしまつた。
ハ すでに死期も近づいたように思われるので、いままらどんな治療を施しても効果は期待できない。
ニ もう仲光がやつてきてしまつたようなので、どのようにふせようとしてもふせぎきすることはできない。
ホ 今では何を食べても似たような味にしか感じないので、どんなご馳走をふるまわれても食べる気がしない。

問二十 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 後深草院二条たちは、重病の父親の快癒を祈願するために、寺院の中で生活をしている。
□ 後深草院二条は、十五歳になるまで、父親に大切な一人娘として可愛がられて育てられた。
ハ 後深草院二条には、自由奔放な恋愛関係をいとわない人物であるといううわさが立っていた。
ニ 後深草院二条の父親は、死期がせまる重病の床にあるにもかかわらず、娘の食事のことを気遣つた。
ホ 後深草院二条の父親は、仕える主人が変つても、とにかく生計のつてを得ることが大切と考えている。

問二十一 「とはすがたり」よりも前に成立した作品を次の中から二つを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 伊勢物語 □ 春雨物語 ハ 太平記 ニ 野ざらし紀行 ホ 風姿花伝 ヘ 新古今和歌集

(四) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ(返り点・送り仮名を省いた箇所がある)。

先儒嘗謂孔子之言性相近也、習相遠也、雖有相近之
說、而不言其善惡。自孟子始有性善之說。孟子既以爲
善、故荀卿以爲惡。善惡。A 已言之矣。故揚雄以爲上中下三等。
惡混。善惡混。揚雄既言之矣。故韓愈以爲上中下三等。
起諸子紛紛之論者、蓋自孟軻啓之。是說何其淺也。君
子之語道、惟其是而已。豈宜求異而自立其說哉。殊不
知孟子性善之說、蓋本於易之繼之者、善、成之者、性之
說。真不易之論也。荀卿之所謂惡者、是以情爲C也。
揚雄之所謂善惡混者、是以習爲性也。韓愈之所謂上
中下三等、是以才爲性也。皆不明其本。明其本者、惟
孟子性善之說、爲至當。

〔東園叢說〕による

注 先儒：先代の儒者。

性相近也、習相遠也…『論語』の言葉。

孟軻：孟子。

荀卿：荀子。

揚雄：前漢末の人。

韓愈：唐の人。

何其也…なんとであるうか。

繼之者善、成之者性：儒教經典の一つ『易経』の言葉。

問二十二 空欄 A

に入る語として最も適當なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 孟荀 ロ 孟子 ハ 荀子 ニ 孔子 ホ 孔孟 ヘ 孔荀

問二十三 傍線部 B

「豈宜求異而自立其說哉。」の返り点として最も適當なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマ

ークせよ。

イ 豈宜求異而自立其說哉。
ロ 豈宜求異而自立其說哉。
ハ 豈宜求異而自立其說哉。
ニ 豈宜求異而自立其說哉。
ホ 豈宜求異而自立其說哉。
ヘ 豈宜求異而自立其說哉。

問二十四

この文章からわかる筆者の意見に合致するものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 『易経』以外に真理はないのであり、その根源にあるものこそ性善説である。

ロ 人はどうしても悪いことをするので、性善説に則った教育をする必要がある。

ハ 孔子に始まる儒家思想は相當に完成したもので、やはり『論語』を出発点とすべきである。

ニ 先儒が説くように揚雄や韓愈の説にも採るべきところがあるので広く学ぶべきである。

ホ 先儒の言うとおり性善こそ人間の本性であり、他の説はそれを展開したものにすぎない。

ヘ 儒家思想において人の性の善惡をさまざまに論じるのは、本質的なことではない。

問二十五 空欄 C

に入る語として最も適當な一字を本文中から選び、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

〔以下 余白〕